華嚴經第三部の模型及び其素材に關する研究

佐々木月樵

一

華嚴經は大體前後二篇に分たる。予は、更に組織上之を三部に分つて研究考察することを最も便利と思ふものである。卽ち、本經七場の說法中、第一、第二、第七の三場は、之を第一地上部とし、次に第三、四、五、六までの欲界四天の說法は、之を第一地上部に對して第二天上部と名く。第八場卽ち最後の入法界品は、前篇二部は天上地上の別あるも、共にこれ我大聖釋尊を主人公とするにもかゝはらず、今篇は光景一變して善財童子を主人公とし、童子の、地上南方へと漸次菩薩行を尋ね行く求道の物語にして、予は常に之を後篇第三部と名けて居るものである。

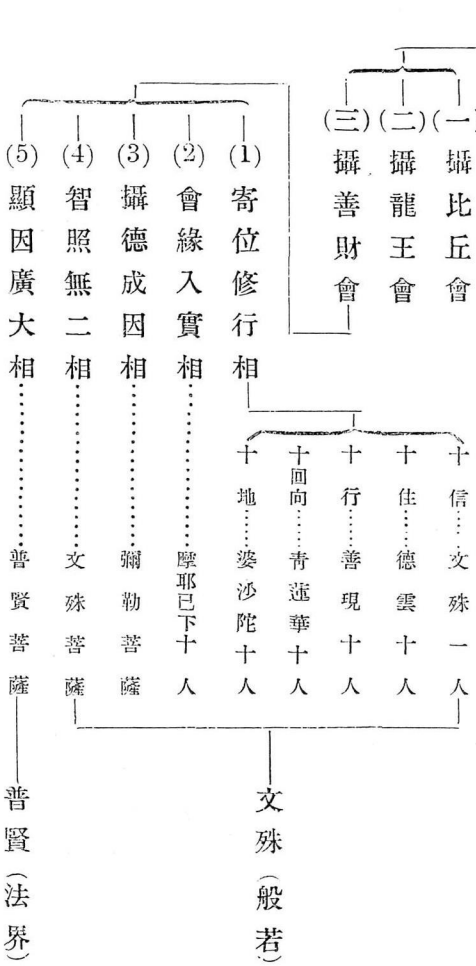
吾人が、今茲に少しく考察し開陳しやうと思ふのは、正さしく『華嚴經』「入法界品」卽ち吾人の所謂第三部の模型及び其素材に關する研究考察である。

『華嚴經』全部は、何を表現する爲めの經典かといへば、こはいふまでもなく、古人も既に說破しつゝあるが如く、菩提樹下に於ける佛陀の正覺を開顯したる經典であることは、近く之を經の「始正覺」の文に徵するも明かなことである。この事は事實であるが、現存の經典そのものをば、直ちに當時の直說そのものとして取扱ふことは、恐くは世人は許しても經典そのものは何人に對しても決して之を許さぬ。何せかといふに、現に本典には三部何れにも各處に經典の引用あつて、本典成立已前に既に多くの經典の流布し、本典はそれらの經典を素材として成立しつゝあることを暗示して居るからである。例せば第一地上部中では、『現三世一切諸佛集會經』とか、或はまた『一切法界自性離垢華嚴』等の經名に接し、第二天上部「回向品」には、「如三世菩薩回向一如諸佛所說『大回向經』回向」と回向の說明を『大回向經』に讓り。また同「十地品」には、「彼佛(盧舍那佛)常爲廣說經法乃至廣爲說『本生經』等の文を見るのである。かゝる「經中經」の實例は、第三部「入法界品」に至つては、益々その多きを加ふることである。卽ち、先づ、之を前にしては、『普眼經』は第三善知識海雲比丘之を誦持し、之を後にしては第五十二善知識彌勒菩薩また之を傳持して居る。また第五善知識彌伽長者は、同じく『輪字莊嚴經』を。乃至、第三十四善知識喜目觀察衆生夜天の記事中には『功德普雲經』の說かるる事等。思ふにこれら『經中經』の事實は、確かに我現存の華嚴經成立前に既に多くの既成經典の存在せしことを語るのみならず、少くとも、現存の華嚴經典は、その「經中經」典は

勿論、その他の既成經律等の上からも、また自由に幾多の素材を採集し來つて以て、『阿含經』が常に「不可說難解」として置きし所の佛陀正覺の一念を開顯することにこれ勉めたる經典と考ふるの外はないのである。そこで私は、これより正さしくその最も見易き第三部のみに就て、茲に聊かその全部の組織の、文獻上、先づ如何なるものを模型とし、何れの經律等よりその素材をとり來り居るかを考察して見やうと思ふ。

三

『華嚴經』第三部を研究するには、先づ今日原本としては、(1)梵本、(2)西藏本あり、次に漢譯經典としては、(3)東晉天竺三藏佛陀跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經入法界品第三十四、(4)唐于闐國三藏實叉難陀譯『大方廣佛華嚴經』入法界品第三十九、(5)罽賓國沙門般若三藏譯『入不思議解脫境界普賢行願品』四十卷、(6)西秦聖賢(堅)譯『羅摩伽經』三卷、(7)唐日照澤『大方廣佛華嚴經續入法界』一卷とがある。そのうち、後の二經は支譯にして、前の五本は、多少の相違なきにあらざるも、先づ何れも完本若くは完譯として認むることの出來るものである。漢譯本中年代より見ても最も古くして、而かも能く古來學者の常用し來りしは、東晉佛陀跋陀羅譯卽ち世の所謂、舊經(晉經)なれば、吾人もまた專ら茲に舊經に依つて正さしく第三部の結構を見ることとする。舊經研究の權威たる至相及び賢首の考察する所によれば、『華嚴經』第三部の結構は、大體次表の如きものである。



今、かくの如く會に本末を分ち、更に末會をば三會にまで分ち居るも、本會と攝比丘會とは、いはゞ一品の列衆序分とも見るべく、正さしく本品は、龍王會を序曲とする所の善財會を本宗とする

ことは、今更に論述するまでもないことと思ふ。現に唐李通玄の如きは、善財會は單に第三部の中心たるのみならず、華嚴經全體の正宗とさへいふて居るのである。要するに、善財の求道物語は漢譯にては、短きも三卷、長きは正さに四十卷もある所の雄篇大作にして、常識的に考へてもかゝる雄篇大作が根本からして一時に創作されしとは、容易に考へられず、況んや既に論述したりしが如く、そこに既に『經中經』の事實あるに於てをやである。果して然らば、第三部の如きは、恐くは、それ已前にかゝる物語の生ずる所の原型若くは類型の彼の土に存在せしにあらじかとは、早く吾人の抱きし所の推測であつた。げに、吾人の長き想像は、遂に吾人をして、恐くはその模型、少くともその類型をば、『根本說一切有部毘奈耶藥事』第十三卷—第十四卷に得た事である。その物語は、隨分長篇なれば、先きに第三部を至相、賢首の科圖によつて示したれば、今またそれと相應して、私にその律文の物語を目次的に表示すれば、大約次の如くである。

四

第一攝龍王會

般遮羅國南北兩王——北界龍闍城主財王——龍子妙生と城側池——獵師頗囉迦の解咒——頗囉迦龍宮に入つて不空羂索を得。

第二攝善財會（上）

龍闍城主財王嗣なし——太子善財誕生——梵階池と緊那羅王女悅意——獵師悅意を繫取す——善財悅意に染して、悅意善財

の妻となる――王父子と二婆羅門――善財外征の途につく――悅意脫出して故郷にかへる――善財凱旋す。

第三攝善財會（下）

善財愁惱――悅意を尋ねる爲めに出城――旅路――月、鹿麋、蜜蜂、蟒蛇、百舌鳥――無愁樹神――仙人住處――遺言と遺物――人氣を除かんと欲す――善財緊那羅城に入つて試みらる――善財悅意にあふ――後共に故郷那布羅城にかへり、善財位に卽く――〔善財童子者、莫ㇾ作ニ意見。卽我（釋尊）是身。當ニ於ニ爾時一行ニ菩薩行一、名ニ善財王ㇾ。〕

先づ、此第一攝龍王會と、第二、第三善財會との記事は、大體『華嚴經』第三部の結構と全然相應す。然り而して、律文の善財は、前後二度旅行の途に上つて居る。卽ち先きの旅行は、婆羅門の惡計にかゝつて愛妻悅意を宮中に殘しての外征である。次に、後の旅行は、正さしく山を越え、河を渡り、途すがら路傍の禽獸等にも我思ひをよせ、また仙人等にも道を尋ねて、遠く愛妻悅意の行衞をさがして、遂に緊那良の城に入るの旅行である。げに、此善財の後旅行こそ、恐くは吾人が、我『華嚴經』の第三部の模型にてはあらじかと思ふ所のものである。たとひ、これが正さしくその模型ならじとするも、予は少くとも、早く既に印度にはかゝる原型文學のあるあつて、共にその流をうけしものと思ふ事である。それにしても、律文の方が正さしく早く流出して、その形式はその根本原型に近きものと推考する。それに就て、今日我國に殘る所の善財童子の姿をも合せ考ふるに。文殊院所藏のそれは、いふまでもなく合掌地行の姿にして、何人にも南方に善知識を尋ねる華嚴經第

三部の主人公の姿であることは明かである。ところが、此の像は鎌倉時代のものである。ところが、平安朝の宗教畫として萬人の絶代の名畫と認めつゝある所の法華寺の善財童子の古畫に至つては、手に龍頭の旛を持して而かも雲に乘り行く所の姿である。予は、長く之を疑問として居りしが、これ恐くは、今日一般には來迎三幅畫中の一に加へられて居るものゝ、必ずしも他幅の彌陀、觀音、勢至とは關係なくして、その龍頭の旛をとり、また雲に乘り行く所等より推察するに、恐くは、我が先きにいふ所の善財外征の姿ではないかと思ふのである。そは、何れにもせよ、律文と『華嚴經』第三部とには、兩文を精讀しなば、何人も必ずそこに深き關係の存することを知ることゝ思ふ。唯その異る所は、『華嚴經』と律文との上にその求めし所の人の、一は普賢、一は悅意とである。然かもこれとても律文上、悅意は後に衆閣城に住すといひ、また宮中脫出の頌には、

我染觸身故　笑樂住於此　如象得解縛　已脫騰空去

とある。卽ち普賢その人は能く婦人の姿をとり、またその普賢と常に離るべからざる所の象は、既にその住所及び飛行の象徵として律文の悅意の記事中にも斯の如く散見しつゝあるのである。況んや、第三部通貫の基調より考察せば、前篇二部の無明を基調とするに反して、第三部は貪愛を基調とする事に於て、正さしく律文とはまた全くその根本に於て一致するに於てをやである。從うてまた第三部の善財も、また自ら出家救濟を請ふの偈中には。同じく「染愛爲深塹」といひ、或はまた「貪愛被

纏縛ニとも自白して居るのである。加之至相大師智儼も、其著『孔目章』第四には、本經の「梵漢同異義」下に「入法界品」の結構をば、また次の如くに、「貪愛」を基調として、既に慈恩寺所藏の梵本そのものも左の如くに三部に區分せられて居ることを示して居るに於てをやである。

善財離貪藏品第四十二

從リ入法界品初ニ已下至ル爾時文殊說キ此偈ヲ已、告ゲテ善財ニ言、善男子於テ此南方ニ有ニ一國土一名曰ニ可樂ニ已前ニ是。

彌勒離貪名善財所問品第四十三

從下有ニ國土一名ニ可樂上已後、至ニ爾時善財得見三千大千世界微塵知識已前一是。

普賢離貪名竟

在ニ普賢長行後一ニ說偈前有ニ此語一從ニ爾時善財得見三千大千世界微塵一已後悉說如來功德不思議界上境界入品已前是。

五

吾人は一往『華嚴經』第三部全體としての模型少くともその類型を律文の上に考察したれば、茲にまたその重要位を占めつゝある所の彌勒知識下の記事に就て、二三その素材に就て考へて見たいと思ふ。

全體、彌勒菩薩のみは、大小乘共通の菩薩にして、此菩薩に關する所の記事は、一切經中今日數十部の多きに達して居る。華嚴第三部にても、既に先きに示すが如く、梵本にても此菩薩には「離貪

名善財所問品」の別稱を加へ、漢譯にては、その記事は實に五十九卷より六十卷の前半已上を占めて居る。善財は、實に大乘精神の魂とも名くべき菩提心に關しては、初めて二百二十一の寄顯的說明を彌勒から得たことである。然り而して、彌勒佛と釋尊との關係に就ては、諸經律論の說必ずしも一ならず、或は釋尊に先ちて菩提心を發したといひ、或はまた同輩なりしと傳へ、その他いろ〳〵と傳へらるゝが、先づ以て一般には、未來補處の佛卽ち將來佛として傳へられつゝある所の菩薩である。げに、莊嚴幢林の死せし佛の御廟より出立した所の善財が、後に將來佛たる所の彌勒菩薩を尋ねることは、正さに理としてかくあらねばならぬ。『華嚴經』第三部の彌勒は、前篇釋尊を中心とする所の天上、地上何れにも姿を顯はす、茲に最後の地行部に至つて初めてその姿を示すに至りしは、全くこれ釋尊は既に〳〵廟中の人となり、求道者は何人も、佛といへば、今や將來の彌勒に思ひをかける外そこに救濟に應ずる人なきが爲めである。然り而して、吾人はまたその關係をば、既に〳〵小乘阿含經上にその端を發して居るのを見るのである。『增一阿含經』第四十四に次の如き記事がある。

「爾時、世尊告ニ阿難一曰、將來久遠於ニ此國界一、當レ有ニ城廓一、名曰ニ鷄頭一、東西十二由旬、南北七由旬、土地豐熟人民熾盛、街巷處行。爾時、城中有ニ龍王一、名曰ニ水光一、夜雨澤香、晝則清和。是時、鷄頭城中有ニ羅刹鬼一、名曰ニ葉華一、所行順レ法、不レ違ニ正法一。」

「爾時、彌勒見ニ諸人民一已發心歡喜、諸佛世尊常所說法、苦習盡道悉與ニ諸天人一廣分ニ別其義一。」

爾時、座上八萬四千天子、諸塵垢盡得二法眼淨一。

爾時、大將覺王告二彼男人民之類一曰、汝等速出家、所以然者、彌勒今日已度二彼岸一、亦當下度二汝等一使上レ至二彼岸一。

爾時、鷄頭城中長者、名曰二善財一、聞二覺王敎令一、又聞二佛音響一、將二八萬四千衆一、至二彌勒佛所一、頭面禮足在一面坐。

爾時、彌勒漸與法微妙之論、所謂論者、施論施論戒論生天之論、欲不淨想出要爲妙。

爾時、彌勒見二諸人民心開意解一、如下諸佛世尊常所說法、苦習盡道與二諸人民一廣分別義上。

吾人は茲にまた既に『增一阿含』中にさへ、彌勒と善財との關係を見るのみならず。進んでは龍王との關係をも見ることである。飜つて、また『華嚴經』第三部彌勒善知識下の文を剖檢するに吾人はまたそれらの記事中の素材がまた『增一阿含』第十一善知識品及び三寶品等に散布して居ることを認むるものである。今一々煩はしければ、その考證は一切之を省くことゝする。要するに、我華嚴經の中心敎義が、恐くは釋尊の自證としての、阿含の十二緣起四諦等の深化なりしが如く、やがてまた素材に至つても同樣にして、吾人は常にその敎材の佛傳及び阿含殊に『增一阿含』等の上に伏在しつゝあることを認むる。卽ち善財が、海潤國に彌勒を尋ねし時は、彌勒は不在であつた。彼が毘盧樓閣の門外に立ちし時の思ひの上は、あり〳〵と朱梨般特の門前悲泣の影を止め、超梵志の定光如來への花の供養は、やがてまた善珠女なる文殊より得し所の花を彌勒に捧げて門內の人となるの素材ではなからうか。その後、彌勒は、善財に對して、かくいふて居る。

「我從二生處摩離國一來、彼有二聚落一名曰二樓觀一、有二長者子一、我爲說法令一立二菩提我本處一。諸群生業隨二所應化一而爲說法。亦爲父母及諸親屬、隨應說法、安二立大乘一而來二至此一。」

本文の如きは、確かに何等かの記事の抄出にして、吾人は、『增一阿含經』等を此脚註とすることによつて、初めてこれらの記事の意味をば充分に知ることが出來る。要するに、『華嚴經』第三部の龍王會と善財會等の如き、或はまた善財と彌勒との關係記事に就ても、その模型少くともその類型及び其素材の單に有部律のみならず、有部の正依經典たる阿含經等のうちに存することを忖度すべきである。

最後に、また第三部中、華嚴教義上最も注意すべき所の法雲地の善知識瞿波(夷)の記事に徵するに、その記事中、最も注意すべきものは、我日本に來つては遂に覺如師の親鸞聖人傳の一段の模型ともなりし所の本生譚卽ち增上功德主と離垢妙德の契合を說く所の香牙園物語であると思ふのである。此物語は、恐くは、先きに第三部の模型なるべしとして、私に目次的にその意を紹介したる律文中、第二龍王會(上)下の善財と悅意との契合の事實と同一のものと信ずる。げに、此物語は、龍樹もまた之を『智度論』第三十五に、同じく『不思議解脫經』の文卽ち吾人の所謂『華嚴經』第三部の文として引用して居る。『智度論』は、秦の羅什の譯にして、『根本有部毘那耶藥事』は大唐義淨の譯である。物語中に、羅什が財主の太子を德主といふのは、義淨の善財であつて、また喜德女と譯しあ

るは、卽ち律文の悅意卽ち緊那羅女のことである。

傳によると、龍樹は『華嚴經』を龍宮より將來したといふが、『智度論』の引用上より見ると、常に『不可思議解脫經』の名によつて、吾人の所謂第三部の文が、第五卷、第三十三卷、第三十五卷、第五十卷、第七十三卷及び第百卷に亙つて幾度か引用されて居る。そのうち、第三部の文そのものより區分せば、第三十三、第七十三、第百卷のそれは、何れも先きに圖示した所の第三部「攝比丘會」の文にして、次に第五卷のそれは、「善財會」中第八善知識漚舍那優婆夷（舊譯休捨）の語、最後に第三十五卷のそれは、正さしく先きに申した所の第四十一善知識瞿夷の本生譚である。龍樹には、今日またこの外に本經第二部の第四場たる他化自在天會の說法の註釋『十住毗婆沙論』十六卷が殘存して居る。果して然らば、『華嚴經』は龍樹時代には、かくの如く既に〳〵別行し居りしものか、或はまた前篇と後篇とは結集その時より既に〳〵別々のものなりしか、これらの研究に就ては、正さしく歷史家その人の研究に俟つの外なく、予は唯第三部の成立には、『經中經』よりして、そこに他に恐くはその原型の存し、また模型のあつて出來たものにあらざりしかを紹介するまでに止めて置く。

因みに、我親鸞聖人は、『敎行信證』製作には、『華嚴經』は、第一地上部では、明難品、賢首品の二品の文を引用し、第二天上部では、十地品の文を引用し、最後に第三地行部卽ち入法界品に至つては、その引用もまた四度の多きにも及んで居るのである。然り而して、晚年の御消息には所々に

華嚴經の御引文を見る。そのうち、『末燈鈔』の第一通に載せてある所の我聖人七十九歳御認めの建長三歳辛亥閏九月二十日の日附の御消息中の『釋迦如來の御善知識は一百一十人なり、華嚴經にみえたり』の義に就ては、予は一百一十人のことのみは、早くより第三部の彌勒善知識下の「受」文殊師利敎、求善知識、展轉經由一百一十諸善知識問菩薩行」の文によりし事を明にし得しも、そこに「善財の善知識」といはずに、「釋尊」と仰せられし事のみは、何れより考察なされしが長く不審であつた。ところが、吾人は、先きに根本有部第三部の模型等を尋ねしと同時に、またその最後の句の「爾時名善財童子者、莫作異見卽我(釋尊)是身」の文に、初めて御消息の片言隻語にも正さに據る所あることを知つた。